2021 年 12 月

今月の新着図書から

中嶋彰『早すぎた男　南部陽一郎物語：時代は彼に追いついたか』

（講談社ブルーバックス B2183，2021 年）

高等科図書主任
林　知宏

私は高校生の頃，今回紹介するブルーバックスのシリーズを愛読した．相対性理論や量子力学に関する解説（特に都筑卓司の手になるもの）を乱読し，大学に入ってそうした分野を勉強したいと夢に描いていた．現在は，日本人のノーベル賞受賞者も多数に及ぶようになったが，当時は何といっても湯川と朝永の物理学賞がひときわ輝いていた．日本人の知的シンボルといっても過言ではなかった．大学生になって数学を専攻することになったが，ブルーバックスには相変わらず親しんでいた．1980 年代に入って，南部陽一郎『クォーク』が出版された（その後，改訂第 2 版が 1997 年に刊行され，現在も流通している（B1205））．その内容は湯川・朝永の研究に直結し，南部自身も貢献した素粒子論の先端研究についてであり，興味を覚えずにいられなかった．特に，「自発的対称性の破れ」という画期的理論は，極微の世界に想像のつかない深遠さが存在することを実感した．私の胸に南部陽一郎の名が深く刻み込まれたのだった．

私が南部を認識してから，25 年以上経た 2008 年，彼はノーベル物理学賞を受賞した．同じ分野の日本人研究者，益川敏英，小林誠と同時受賞だった．私自身，このニュースを耳にして，「あまりに遅すぎたのではないか」と感じた．当時南部は 80 歳代後半であった（彼は 2015 年 94 歳の天寿を全うした）．ただし，早くからアメリカ（シカゴ大学）を活躍の場にしていたので，南部自身の言葉はわずかしか伝わらなかったように記憶する．今回紹介する『南部陽一郎物語』は，マジシャンにもたとえられるユニークな物理学者，南部の生涯を描くものである．わかりやすい記述で好著であると思う．

戦後，ある時期に集中して，日本人の優秀な才能が，数学や物理学に集まった．これは一つの奇跡である．もちろん世界にも異才，俊才は多くいた．著者中嶋は，そうした綺羅星のごとく並ぶ研究者たちの中で，南部の個性について余すところなく語っている．プリンストン高等研究所での挫折体験や，ノーベル賞受賞に時間がかかったことに南部自身よりも智恵子夫人の方がいら立っていたことも紹介する．個人的に印象深いのは，63 頁に掲げられた写真（京大基礎物理学研究所設立メンバー）である．日本の物理学を牽引した人々が一堂に会して収まっている．若き南部の姿もある．また中央に風格を備えた湯川と朝永の姿が写っている．当時の二人の年齢は，まだ 40 歳代である．戦後日本へのある種のオマージュとしても，この本を読むことができるかもしれない．